平成２９年７月４日

講　談

講談や講釈は、もともと仏教で使われていた言葉です。特に講釈は、仏教の教えを解釈して講義するという意味で使われていました。この考え方は、講談の世界で近年まで受け継がれ、史実を読み聞かせて観客に知識を授ける「耳学問」としての色合いが、強く残っていたのです。

それまでは貴族階級の信仰であった仏教が、一般大衆にも広まろうとする平安時代末期から鎌倉時代にかけては、戦乱が続き社会の行く末を悲観する末法思想の時代でした。諸行無常と浄土信仰を説く軍記物語「平家物語」は、布教のためにふさわしい題材であったのです。

この物語を通じて、仏教の教えをやさしく説くために、発声、発音、抑揚、読み方にもさまざまな工夫がなされていきました。この流れの中から生まれたのが、「平家物語」を語った琵琶法師だったと考えられています。

その後、軍記読みを専門とする僧侶、あるいは本当の僧侶ではないが僧の姿をまねたものが現れます。戦国時代には大名のお伽衆になるものがいました。そしてその中に南北朝の騒乱などを描いた「太平記」を主に読む「太平記読み」もいたのです。その代表的な人物赤松法印は徳川家康に平安時代から鎌倉時代にかけて平家と源氏が栄え、滅びる様子を記した「源平盛衰記」や「太平記」を読み聞かせたとされ、講談師の祖と言われています。

江戸時代になって平和な世が訪れると、大名に軍談を講釈するお伽衆は職を失い、神社の境内や盛り場で口演するようになりました。大阪では天和元年（１６８１年）に天満天神の境内で「太平記」を読んだ記録がのこっております。また、貞亨４年（１６８７年）には、近松門左衛門が「徒然草」を講釈していますが、その際京の講釈師・原栄宅が共演したと言われています。

元禄期（１６８８～１７０４年）には、赤松法印と同じ赤松一族である赤松青龍軒が原昌元と名乗って、江戸堺町によしず張りの小屋を拵えて軍書を読みました。また同時期に、大阪には赤松梅龍がいたと伝わっています。さらに名和清左衛門が、浅草見附の寺で人を集めて「太平記」を読んだのもこのころで、彼は軍書を毎日読み続け、大いに繁昌しました。これが町講釈の始まりを言われています。

亨保期（１７１６～１７３６年）頃には、神田伯龍子が大名旗本の家で軍記を読み聞かせる軍書講談を行いました。彼は町人宅招かれても断ったと言います。同時期に霊全が浅草寺境内によしず張りの小屋を設けて辻講釈を行い、大変繁昌したということです。

霊全に学んで、同じ浅草寺境内で辻講釈を行ったのが深井志道軒でした。彼は僧侶から講釈師になったため知識が広く、時に厳粛に、時には痛烈に朗読し、皮肉を言ったり、ユーモアを交えたりもして観客を抱腹絶倒させました。あまりの面白さに、観客はその揚を離れようとしなかったと伝わっています

次に現れたのは馬場文耕です。この人も一度は仏門に入りましたが還俗して、ついに講釈師になりました。宝暦了年（１７５７年）には、現在の東銀座などに講釈場を設けて演じております。毒舌を得意とし、人気が高かったのですが、幕府が処罰を決めかねていた事件を口演して自分勝手な裁決を下し幕政を批判しました。その上、本にまとめて売ったため死刑となりました。

森川馬谷は、講釈場の伝統的な看板やビラの書き方を始めた人です。また、１日の読み物を軍書物、お家騒動、世話物の順で区別して読むことや、前座を一人使うことも始めました。ここにおいて江戸の講釈界の形態・基盤が整いました。

江戸時代後期には講釈も話芸としての形を整え、大衆に定着していきました。伊東燕

晋は、家督争いを描いたお家騒動や世相風俗を描いた世話物を読むことを嫌い、「曽我物語」などの軍記物だけを読みました。湯島天神の境内に住み、自宅を「講釈場」としましたが、常に羽織袴を着用し、丁寧に挨拶をするので、客も静かに聞いたということです。講釈は徳川家康の業績などを民衆に説く「御記録読み」なので、群衆より高い所から口演しなければならないと奉行所へ願い出て、高さ１メートル弱の高座で初めて演じた人物でもあります。

桃林亭東玉は、堅苦しいものだった講釈を分り易くし、面白く演じたので、女性も彼の講釈を聞くようになりました。その反面、軍書講釈の神話が崩れ、落語家同様の芸人だという批判も受けました。

東流斎馬琴は、それまでの講釈師が棒読みで演じていたのを男は男、女は女というように老若男女の声を変えて読み、身振りも加えて分りや安く演じたので大衆に喜ばれました。また、優秀な門人を多く育てました。

このような盛り上がりに水を差したのが、天保の改革（天保１２～１４年、１８４１～１８４３年）です。老中水野忠邦を中心とした幕府が行った改革で贅沢が禁止され、江戸市中に１７０件余りあったと言われる講釈場を落語と併せて１５軒に減らされてしまいました。しかし、禁制がゆるみ・廃止されると再び講釈は盛り返し、「講釈」は「講談」と呼ばれるようになりいよいよ全盛期を迎えます。

幕末から明治２０年（１８８７年）頃までは、名人上手が多数現れて全盛期を迎え、どの講釈場も満員となる大入りが続いたと伝えられております。これらの大衆の中で、講談中興の祖と言われるのが、２代目松林伯圓です。新作物や改作物を数多く創作しました。その中には、「天保六花撰」など、世話講談の傑作や明治時代の事件をまとめたものもあります。得意としたのは「鼠小僧」などの泥棒の演目で、「泥棒伯圓」という異名も付きました。「天保六花撰」をはじめとして歌舞伎化された作品が多いのも特色です。

流暢な読み口で、２時間続けて口演しても客を飽きさせなかったと伝わるのが桃川如燕です。化け猫の怪談を集めた「百猫伝」の作成者としても有名です。また、伯圓も如燕も、御前口演を行った数少ない演者としても知られています。

きれいな読み口で聴衆を引き締める呼吸が上手かったのが、三代目一龍斉貞山です。特に「赤穂義士伝」を得意中の得意としました。そして優秀な弟子を多数育て上げました。

速記術の発達とともに口演の速記が新聞に掲載されたり、単行本として発行されたりするようになりました。速記の口演をした講釈師の実演を聞いてみようと、今まで寄席に親しんでいなかった人々が釈場に足を運んだのも一因となって、明治３０年代の「講釈場」はまだまだ賑わいを見せていました。

また、明治末期からは講談の物語を少年向けの読み物として文庫化した「立川文庫」が発行されました。立川文庫は、講談の世界を少年たちに身近なものにしました。少年向けの講談は人気が高く、複数の出版社から出版されています。

二代目広沢虎造の浪曲でよく知られている「清水次郎長伝」を虎造よりも前に口演し抜群の人気を誇った三代目伊藤痴遊など、名人上手と言われる講釈師も登場しました。

しかし、大正時代には講談界や釈場にかつての勢いがみられなくなりました。大正１４年（１９２５年）にＮＨＫのラジオが開局した際には、公序良俗にかなうものとして講談は数多く放送されましたが、昭和１０年代には落語や浪曲に人気が逆転されてしまいます。

昭和４０年代前半には東京の講談師は２４人となり、危機が叫ばれました。しかし５０年代から女性講談師の入門が増え、現在では男女の比率が逆転しています。ただし、長い間、男性が演じる芸であった講談は、女性演者にふさわしい演目は限られています。そのため新作が次々と作られるようになりました。題材も小説にとどまらず、オペラや

アニメなど、その幅も広がってきています。また演じる方も一人芝居に近い形式もあれば、朗読や語りに近いものもあります。さらに複数の演者で芝居のように演じたり、舞踊を取り入れたりと、様々な試みが行われています。

このように現在の講談は伝統に縛られない形で発展を遂げています。しかし、余り朗読や語りに近づきすぎているものもあり、講談と朗読や語りの線引きはどこで行うのかといった課題も生まれています。

ところで、「落語」と「講談」はどこが違うのでしょう。簡単に言えば「落語」が会話によって成り立つ「間」を大切にする芸であるのに対し、「講談」は話を読む芸であり「調子」が大切であると言えます。勿論、読むと言っても単なる朗読と異なり張り扇と釈台を使って独特の喋りを展開する芸です。

講談師の団体は「日本講談協会」と「講談協会」の二つです（東京）。日本講談協会は神田松鯉をはじめとする神田のみの２０名程度で構成されているのに対し、講談協会は一龍斉、神田、宝井、田辺などで構成されており４０名強が所属している。

講談師の階級は落語と同じ前座、二つ目、真打の３つである。

「文化デジタルライブラリー」より

以上